「死刑でいいです」と言った少年

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」
東京都荒川区南千住1-59-6-302
http://sobanokai.my.coocan.jp/

山地悠紀夫さんという二五歳で死刑執行をされた少年がいた。二〇〇九年七月二八日のことだ。

一六歳で母親を殺害し、少年院に入り出てきてその後、大阪で姉妹を殺害し(二〇〇五年一一月一七日)死刑を宣告された。

死刑が確定してから二年二ヶ月後の執行だった。少年院の診断では「他人に共感できにくい広汎性発達障害」とのことだ。山地さんは父親を失くし母子家庭。貧困にあえぎ、母親は山地さんのアルバイト料にも手をつける始末。付き合う女性にも圧力をかけた。

山地さんは「自分は生まれてくるべきではなかった。死刑でいいです…」と言い上告を取り下げた。支援者、弁護士との文通は一切拒否したという。

こんなにも少年を孤立させ悲しませ、絶望感を与え、絞首という死刑執行に追い込んでいいんだろうか!あまりにも悲しすぎる人生だ。「死刑でいいです」という言葉にどれほどの悲しみと絶望が溢れていたことか…、計り知れない。

居場所のない子供たちを自殺、殺人への道に追い込んでしまう社会を変えていかなくてはならない。

今年六月六日の朝日新聞に「秋葉原の後悔胸に、歩む」といったタイトルで一五年前の六月八日(日)に起きた、秋葉原の事件を胸に抱えながら生きてきた大友秀逸さん(四六歳)の記事が出ていた。

当時働いていた仙台の警備会社で加藤智大元死刑囚と同僚だったという。『あの時もう一歩踏み込んで話をしていたら…』と後悔して「秋葉原事件・加藤智大の元同僚で友人です」と、実名で発信するツイッターを開設しDMに返信し時には会いに行くという。そして今は保護司をめざしている。

あの時、率直に相談できる仲間がいたら、心を開いて相談していたら、自殺を図ることはなかっただろうし人を殺傷することもなかっただろうに、と思ってやまないのだろう。

仲間はずれにしないで声をかけ、話し合い一緒に行動していれば…と、後悔することは誰にでもあることではないだろうか。する方にしろ、される方にしろ。

今年七月一八日は京アニ事件四年目だった。裁判員裁判が九月五日から京都地裁で始まる。

青葉真司被告の放火で三六人が亡くなり三三人の重軽傷者が出た。親を失くし子供を失くし、孫を失くしたそれぞれの遺族にとってこの四年間は時が止まったままで何も出来なかったかもしれない。

怒りのほこ先をどこにぶつければいいのか。青葉真司被告は九〇%のやけどという瀕死状態で懸命の医療体制がしかれ一〇ヵ月後に意識が戻り、医師や看護師に対して、“自分を助けてくれた人”がいたことに涙して感謝したという。

いずれにしろ、「生命」を大切にしてほしいものだ。(T)